

文芸

俳句

昼ごろに人のちらほら春の土手

池田 逸子

漸くに逢えた一時春の夢

伊藤 敬子

お興入れジャングル育ちの青き蘭

今関満喜子

畦道に残る余熱や野焼きあと

魚地 照子

鶯の輪のゆるりとひとつ寒の明け

江森 悦子

せせらぎの音かかえ来る春の風

川島 孝夫

夜も昼も憚ることなく恋の猫

川島 通則

春立ちて鬼と仏が動き出す

向後 寛

春寒や疎遠詫びつつ句友の通夜

越川せつ子

鶏や春を広げて刻を告ぐ

小松 藤男

春蘭の花をふるわし地震忍ぶ

佐瀬 輝夫

恋猫の満たされてみて毛づくろい

椎名万里子

闇深く昴ぶり止まず恋の猫

鈴木とし子

もう一年折り折られ春の雪

鈴木 利子

芽柳や穂先まぶしき雨あがり

玉虫 栗扇

家路就く春の夕日に見惚れつつ

土屋美枝子

走るのも歩くのも好し新芽立つ

土屋 義昭

背のひくきわれに帽子や山笑ふ

戸村 静華

露のとう絵手紙にしてみるもよし

早川 勇

短歌

戸を練れば庭一面の雪明かり

障子に光り部屋にも入り来

西山満里子

目を凝らし広辞苑を引く吾に

幼はそつとルーペ差し出す

青木 秀子

風邪に臥す男孫に食事持ち来しが

深き眠りにそつと置き来ぬ

鈴木まさ子

童謡のCD眼を閉ち聞きをれば

何時ししか心昔に遊ぶ

田崎 尚美

氷張り天水桶に住む目高

底ひに寄り添ひ動かずにをり

押尾 輝子

短歌会に持つて行つてと離れ住む

姪は手提げを送りくれたり

芹川 初子

オーバーの襟立て駅を出づ夫の

裾を寒風揺さぶるりるたり

島田ますみ

同世代の夫婦ばかりを目は追ひぬ

夫逝きはやも二百日過ぐ

八角 三枝

念願のサンルーム成り椅子に座し

明るい陽射し身に受けるたり

吉岡 信子

柵の白き小花に冬日射し

すがすが香り吾家守るか

平山 芳子

遠く住む娘が月二回忘れずに

訪ひ来て呉るる夫逝きてより

斉藤つね子

もう一度おいしいの声きたくて

おでん作りし母の命日

越川 義則

何一つ誇るものなき吾なれど

生の証しをたどたと詠む

高梨 キヨ

積る雪古い我家も枯れた木も

ほこりの街も輝く浄土

越川 福子

日溜りの小草つまめば指肌に

触れてやわらか春の黒土

土屋 好

歌の趣味相手要せず独り詠む

時の思いを永久に残せり

伊藤 定男

ブラジルの地に眠りたるいもうとの

我が仏壇に写真入れおき

内藤 くに

こうほう博物館 49

百年前の切手

明治時代、日本に近代的郵便制度ができて、すでに百四十年になります。現代でこそ人々の間での通信手段は、メールや携帯電話など、その目的に応じてさまざまにありますが、当時は手紙による手段しかありませんでした。その手紙を全国的に効率よく、また信頼性をもって配達しようという制度「郵便制度」を導入したのが前島密でした。明治四（一八七一）年、前島はイギリスのこの制度を導入し、そして、手紙の配達料の前払い証紙として切手が発行されました。今回はこの切手について紹介します。

は、一般的に使う普通切手のほか、国家的行事を記念して発行される記念切手や、国宝シリーズや国立公園切手などたくさんの特種切手も発行されました。これらの日本の切手の中で、最も多く使われている図柄が花です。最近では、ふるさと切手と呼ばれる各地域で発行される切手の多くは、花のデザインが用いられています。

四月には町民ギャラリーで花の切手展を開催しますので、数センチ画の芸術をご覧ください。



▶百年前の切手「菊切手」